

雑司が谷旧宣教師館だより

第 60・61 合併号

2018 年 3 月 23 日

豊島区立雑司が谷旧宣教師館

〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷 1-25-5 TEL/FAX 03-3985-4081

オータムコンサートを開催しました



リハーサル風景



「小さい秋みつけた」合唱中の様子



迫力ある小林さんのピアノ演奏

昨年の10月8日に行われたオータムコンサートでは、
きたしまかよ北島佳世さん（ソプラノ）、やすらおかたいら安良岡平さん（バリトン）、
こばやしもえり小林萌里さん（ピアノ）をお迎えし、演奏していただき
 ました。

曲間のトークをはじめ、「魔笛」" パパパの二重唱 " での
 パパゲーノ（安良岡さん）のもとにパパゲーナ（北島さん）が
 現れるシーンを旧宣教師館の上げ下げ窓を使った演出で表現
 するなど、会場を盛り上げていただきました。コンサートで使
 われたウェスタン・ピアノは、日本で初めて国産ピアノを製
 作した西川安蔵の手によるもので、このピアノの音色が堪能
 できるピアノソロを含む、全 11 曲を演奏していただきました。
 アンコールとして来場者も一緒に「小さい秋みつけた」を歌
 唱し、曲名どおり、秋の訪れを感じるコンサートとなりました。



コンサート終了後の記念撮影

リニューアルした展示について

雑司が谷旧宣教師館は、都内でも数少ない明治時代に建築された宣教師館として、東京都の有形文化財に指定されています。この貴重な歴史的建造物を保存していくため、5年に1度のペースで外壁塗装と破損・汚損箇所の修理など大規模修繕を行ってきました。

直近では、2015年10月5日から2016年3月31日まで休館し、外壁塗装のほか、1989年の開館以来となる展示のリニューアルもおこなわれました。2016年度に発行された「雑司が谷旧宣教師館だより」57号、58号、59号では、2011年の東日本大震災の被害でひびの入った館内部の漆喰壁の修復の様子や、リニューアル記念イベントの様子をご紹介しましたので、本号ではリニューアルした展示と、その工夫についてお伝えしたいと思います。

旧宣教師館の展示空間と活用

雑司が谷旧宣教師館を訪れると、当館に住んでいたマッケーレブに関する展示はもちろん、大正時代の児童文学雑誌として名高い『赤い鳥』の復刻本が全巻ずらりと並ぶ部屋や、雑司が谷地域の紹介として関係のある文化人を紹介するマップ、あるいは、約40年間雑司が谷に住み、文化活動のかたわら、地域の発展に努めた秋田雨雀の展示コーナーがあるなど、地域を紹介する資料を展示していることにお気づきになるかと思います。

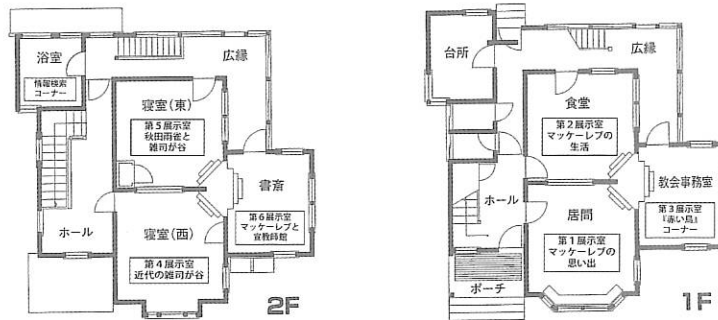
これは、1985年、豊島区の施設としての運用を検討する委員会において、①建物自体の保存・公開、及びマッケーレブの紹介をすること、②建物内部の一部にマッケーレブの生活を再現できる当時の家具、調度品を置くこと、③郷土の紹介として雑司が谷地域の文化がわかる資料を展示すること、が決定したことによります。つまり、雑司が谷旧宣教師館は「建造物の文化財」として建物が保存されるだけでなく、地域に関わる資料を展示し、また、地域の文化振興を目的とした様々なイベントを開催する博物館施設としての役割をも持った施設なのです。そのため、地域住民の方々にも人気の高いコンサート事業や、毎月開催されている「『赤い鳥』を語り継ぐ、おばあちゃんのおはなし会」、あるいは親子向けの体験講座や歴史文化講座など、長年にわたり多種多様な催しが行われてきました。

しかし、こういった催しをするにあたり問題点がありました。十分なスペースを確保しづらいことです。雑司が谷旧宣教師館は、宣教師として来日したマッケーレブが自分の家として建てたものであり、そもそも展示施設・文化施設としての構造をとっていないこと、また文化財に指定されているために保存が最重要であることから、一般的な博物館のように“博物館として建てられた建物の中で事業を開催していく”、といったものとは施設の活用方法も変わってきます。当館では、常設展示として、ほとんどの部屋に展示のための什器が設置され、それらを一度別の場所へ退避させて空間を作ることになりますが、もともと展示什器は移動することを前提に製作されていないため、リニューアル前数年間については、イベント時の募集定員は制限せざるを得ませんでした。そこで、2015年度下半期に実施した大規模修繕・リニューアル工事において、床面を傷つけずに移動可能な展示什器に変更すること（1階「居間」部分）が決まりました。

さらに、1989年の開館以来、展示替えをおこなっていないため、展示什器類の老朽化が進んでおり、クリーニングや補修・修理が必要な状態であることから、①各展示室のパネルの改良、②展示ケースのクリーニングやガラス取り換え・台座のクロス貼り、③模型のクリーニング及び建物の位置関係などをわかりやすく示すためのサインの設置、④映像資料のデジタル化と修正、⑤展示用照明のLED化、なども改善点に含めました。

新しい展示の方針

さて、1階「居間」部分の展示什器を可動化するにあたり、展示物を配置しながらも来訪者の方々が建物自体の空間を理解し親しんでいただけるように、館全体の什器と展示の配置を考え直すことにしました。もちろんリニューアル前の展示構成を基本としつつ、6部屋をテーマごとに再構成し、さらに各部屋のテーマに沿った300～400字程度の解説文を設置することで、初めて来館される方にも各部屋の役割を理解していただけるように構成しました。



・第1展示室（居間）「マッケーレブの思い出」

1階の第1展示室および第2展示室（居間と食堂）でワークショップや演奏会・講演会が実施できるようにするため、展示什器類の工夫が求められました。食堂に関しては、机や椅子の移動は比較的容易だったものの、居間は展示什器が多く、配置について再考する必要性がありました。そこで、居間部分の宣教師館敷地模型を2階の「近代の雑司が谷」部分に移動、また、マッケーレブの紹介ビデオとマッケーレブ年譜等を展示する什器が床に傷をつけずに移動できるよう底面にクッション材をつけ、職員数名で容易に移動できるようにしました。また、マッケーレブの年譜はわかりやすく見やすいデザインに変更し、マッケーレブの一生と日本での生活を包括的に捉えられるようにしました。

・第2展示室（食堂）「マッケーレブの生活」

開館当初より当時の生活を再現する部屋として活用してきました。各部屋に設置してある解説パネルを他と同じくリフォームするにとどめました。

・第3展示室（教会事務所）「『赤い鳥』コーナー」

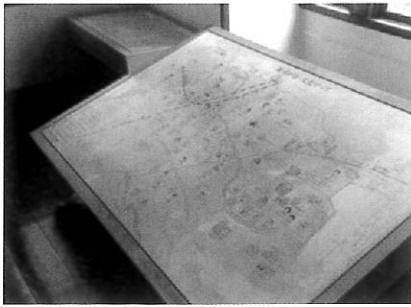
展示室の名称を「児童図書コーナー」から「『赤い鳥』コーナー」へと変更しました。大正時代の児童文学雑誌『赤い鳥』は、鈴木三重吉の手によって豊島区目白で発刊されたものです。質の高い児童文学雑誌のさきがけとなったこの雑誌を多くの人に知っていただくため、当館では複製本を配架しています。また、『赤い鳥』と同時代の児童書や、雑司が谷に住んだこともある小川未明の童話集も自由に閲覧できるようにしています。



◀ 左はリニューアル前の第2展示室から見た第1展示室の様子、右はリニューアル後の様子。

・第4展示室（客人用の寝室）「近代の雑司が谷」

「大正・昭和の雑司が谷」、「雑司が谷文化人マップ」、「雑司が谷文化史年表」の3種のパネル台の平置きを止め、新規に設置した展示用のピクチャーレールを使用して壁面展示とし、「雑司が谷文化人マップ」は、カラー版の観やすいデザインとし、さらに2階へ移動した1階第1展示室の宣教師館敷地模型は、クリーニングを行った後、宣教師館などの建物位置がわかりやすいようにサインを付け表示。もともとこの場所に設置してあった雑司が谷地形模型も、宣教師館の位置を示すサインと、弦巻川の流路がわかるよう青色で着色しました。多数の文化人の住んだ近代雑司が谷地域と、そこを拠点に宣教活動を続けたマッケーレブ邸の位置関係がよくわかる展示室になりました。



雑司が谷文化人マップは、リニューアル前（左）よりも情報をわかりやすく配置、解説を増やしました。

・第5展示室（寝室）「秋田雨雀と雑司が谷」

秋田雨雀のプロフィール解説に内容を追加し、コーナー解説として再製作。また、当館で所蔵していない雨雀関係資料の一部については、新たにレプリカを製作し展示しました。展示室入ってすぐの什器2基については、配置を縦並びから横並びに変更し、展示見学スペースを確保しました。



リニューアル後は什器の配置を変えることで、展示の導線がわかりやすくなりました。

・第6展示室（書斎）「マッケーレブと宣教師館」

全国の宣教師館の分布図は、経年劣化が激しかったため新規に製作。第4展示室と同じく、平置きの台に展示していたものをパネル化し、ピクチャーレールにワイヤーで吊るす形で展示することになりました。マッケーレブのベッドの来歴についての展示パネルは、ベッド上に置いていたものを新規に設置したピクチャーレールを使って展示することになりました。

旧宣教師館の歴史的・文化的価値を損なわないよう、什器や造作の設置等は最小限にとどめ、建物本来の雰囲気味わえる展示施設となった雑司が谷旧宣教師館。

今回のリニューアルの重要なポイントの1つでもあった什器のスムーズな可動化によって、各イベントの受け入れ定員が増し、多彩な事業展開が可能となりました。今年度のイベントや講座の様子は他ページで紹介していますので、そちらもぜひご一読ください。

旧宣教師館イベント報告

秋の歴史文化講座を開催しました①

雑司が谷旧宣教師館の周知活動の一環として、また、東京都が行う「東京文化財ウィーク」の企画事業の一つとして、昨年度に引き続き、今年度も雑司が谷地域の歴史・文化に詳しい先生を講師にお招きして講座を開催しました。

当館の所在する雑司が谷地域は、雑司ヶ谷鬼子母神を中心として江戸時代以来の信仰空間が広がり、また、明治時代以降は鈴木三重吉や秋田雨雀といった文化人が住まう住宅地であり、歴史的にみても多彩・多様な地域です。今年度は、江戸時代以降の雑司が谷地域を形成する基礎となった中世の雑司が谷を学ぶことを目的としました。

講座は全 2 回、第 1 回は台東区文化財保護調査員の伊藤宏之先生に「豊島区の板碑と雑司が谷」、第 2 回は新宿歴史博物館学芸員の今野慶信先生に「中世の雑司ヶ谷と鬼子母神信仰」という演題にてご講演いただきました。(以下は、ご講演の要旨です。)

・「豊島区の板碑と雑司ヶ谷」(台東区文化財保護調査員・伊藤宏之先生)

日本中世・近世史の^{きんせきぶん}金石文(金属製の工芸品や梵鐘、あるいは石碑・石塔などに刻まれた文字)、なかでも中世の供養塔である^{いたび}板碑をご専門にしている伊藤先生には、豊島区の板碑と雑司が谷についてお話しいただきました。

豊島区の板碑は江戸時代から興味をもたれ、『^{しんべんむさしふどきこう}新編武蔵風土記稿』などの当時の記録に記述が散見されており、近代・現代を通して徐々に研究が進んでいきました。その中で今回取り上げられたのは、「^{だいもくいたび}題目板碑」と呼ばれる板碑です。題目の刻まれた板碑は日蓮教団(現在の日蓮宗)によるもので、板碑の分布と教団の拡散には密接な関係があるといえます。豊島区には失われたものを含め、合計 8 基の題目板碑が確認されていますが、雑司が谷地域は長崎地域とともに偏在する地域で、雑司が谷の日蓮宗寺院である法明寺との関連性がうかがえます。講演の後半では、法明寺を開いた日源が開山した他の 2 寺のある地域(台東区と目黒区)との比較も行われました。(今野先生のご講演の要旨は 6 ページをご覧ください)



旧宣教師館イベント報告

秋の歴史文化講座を開催しました②

・「中世の雑司が谷と鬼子母神信仰」(新宿歴史博物館学芸員・今野慶信先生)

日本中世史、特に東京の中世武士団(豊島氏、江戸氏、葛西氏など)のご研究をされている今野先生には、今回、土着した人々と信仰の関係性について、雑司が谷地域の成立を踏まえながら、お話を伺いました。

雑司が谷の地名について、まず、「谷」は弦巻川の流に沿うようにあった谷を指しており、「雑司」についてはそれぞれに由来があり「蔵主ヶ谷」「僧司ヶ谷」「曹司ヶ谷」と表記されていたのを、江戸時代に「雑司ヶ谷」と定められたことが、その起こりです。雑司ヶ谷村の中心地は、「雑司ヶ谷」という地名の起こりと、中世、地域の鎮守社には御嶽神社(御嶽蔵王権現)が多かったことも踏まえると、弦巻川近くの御嶽蔵王権現のあたりではないか、ということが考えられます。

また、雑司ヶ谷村の成立時期を推察できる史料は、『北条家所領役帳』内の記録や、雑司ヶ谷旧家の伝承、あるいは板碑など様々にありますが、その中でも人々の集まりがあったと推察できる古い記録として、寺社の縁起が挙げられます。現在の法明寺は、威光寺という名の天台宗寺院だったものを、1312年に日源が日蓮宗に改宗したという記録(出典:『^{はぜもみじ}櫛楓』)があり、また、真言宗であった清立院は1257～59年に日蓮宗へ改宗したと伝えられています。日蓮宗とも繋がり深い鬼子母神についても、1561年に地中より掘り出され、次の年に鬼子母神堂が創建された、と書かれており(出典:『櫛楓』)、地域の成立はもちろん、13世紀半ばより始まった雑司が谷地域の日蓮宗の信仰が、徐々に根付いていった様子がうかがえます。

さて、江戸期には鬼子母神が雑司ヶ谷の鎮守社となりますが、その前は、前述した御嶽山清立院の境内社である御嶽神社であったとされています。この神社を奉祀していたのは旧家のなかでも特に古く、中世の初頭からいた土豪・長島氏でした。南北朝以降、田口氏、ついで柳下氏が来住するのですが、特に柳下氏は来住の前から法華(日蓮宗)門徒であり、移住してからは鬼子母神を尊崇したことが、鎮守社が変わっていった理由と考えられます。柳下氏も、移住の際に日蓮宗が根付いていることを踏まえたうえでこの地に腰を下ろした可能性もあります。



以上の伊藤先生、今野先生の講座内容には、共通する点がいくつかありました。特に、中世に村が成立したとされる雑司が谷地域の歴史を追究すると、国の指定有形文化財にもなっている雑司ヶ谷鬼子母神堂をはじめ、現在に遺る寺社と人々の関係性が浮き彫りになり、非常に興味深い連続講座となりました。

※雑司が谷の鬼子母神の「鬼」は、実際は上部に点のつかない「ツノのない鬼」の字になります。

※1966(昭和41)年の住居表示実施によって、「雑司ヶ谷」はその地域を狭め、現在の表記である「雑司が谷」へと変更されました。

【執筆・編集 小山勝美(学芸研究員)】